

モビリティ 未来の夢 たなか踏基

私は日本で開催された、三つの万国博覧会を経験している。最初は大阪千里丘陵で開催のEXPO70、”人類の進歩と調和”テーマ大阪万博(一九七〇年三月十四日～九月十三日)、それから十五年後開催のEXPO85、”人間・居住・環境と科学技術”テーマの、つくば万博(一九八五年三月十七日～九月十六日)、今回の名古屋東部丘陵開催のEXPO2005”自然の叡智”テーマで愛称「愛・地球博」の、愛知万博(二〇〇五年三月二十五日～九月二十五日)であるが、いずれの万博も想い出深い。

大阪万博は、日本初で然も高度成長期の開催だったから、大変な賑わいで六千四百万人もの人々が訪れたという。岡本太郎の太陽の塔が印象に残った。私も大阪の市内の両親の家に泊めてもらって観にいった。つくば万博の時は、二十万人の人が訪れたというが、大きい頭のピアノ演奏ロボットが一番記憶にある。開発者は今でも年賀状を遣り取りする早稲田大学の教授であった。

平成十七年五月二十八日、大学同窓会が東海支部の主催で「愛知万博総会」と銘打って開催された。私は、全国理事と地区支部長を拝命していたので、家内同伴で参加申込をした。全国総会であったから、それなりの議案審議もあるのだが、参加者のお目当てはやはり翌日の万博観光であった。家内は総会前日、既に別行動でトヨタ館を見学していた。当日、蒲郡商工会議所で行われた講演会は、圧巻で感激した。演題「未来パーソナルモビリティ(PM)の

開発にあたって」であった。大学OBがトヨタ自動車に沢山いたことが効を奏したらしい。私の主目的のひとつもこの講演にあった。未来型移動体のコンセプトに関するもので、開発に携わった担当責任者、第二商品開発本部統括主査エクゼクティブチーフエンジニアの肩書き、トヨタグループパビリオンで話題の人物、五十歳のK氏が直接招聘されていた。

私が地球温暖化、特に炭酸ガス削減問題に興味をもっていたのには理由があった。それは、最後の研究所勤務で、開発に関わった素材が端緒である。素材は、同僚の研究所長が開発した高強度無機複合素材、鉄鋼生産時に大量に副生する廃棄物利用の優れたリサイクル技術開発であったからだ。数年間、試販売をしながら製造研究を継続、その見極めを実施していたが、展望が開けず、私の所属会社では、力不足で事業化を断念した経緯があった。その事業最終処理の際に、会社の事業化潰しの腑に落ちない、恣意的で姑息な謀略に私は今でも憤りを感じていたからである。

開発した講演者は、会社の宣伝VTRを交えながら、夢のある未来型パーソナルモビリティ(PM)のプレゼンテーションを行った。講演時間の約二時間が、とても短く感じられるほどの衝撃の内容であった。低速姿勢から高速姿勢モードにまで変化する、この構造可変型のPMの普及によって、個人の自由な移動空間への広がり、人をより深い「人間性の拡張」へと誘い、より親密な「地球との共生」をもたらすものであると熱っぽく講師は、その日の聴衆に語り掛けていた。

先ず冒頭講師は、人の基本は「個」であり、

個の移動こそが生物を生物として存在させ、人を人として存在させる基本であると述べた。現在は、五～六人乗りの乗用車に一人で乗って移動し、効率の悪い空間占有とエネルギーロスが発生している。何故一人乗りのPMなのか?それは生命の原点である人の可能性を広げるモビリティを位置づけたからである。PMの発展は、人の五感を研ぎ澄ますである。

う・人の喜び悲しみを素直に表現できる可変移動型の未来の乗物として・PMそのものが人であるかの如き挙動を示し・未知の世界へと人を運び・PMを通じた人の出会いが、創造性の源を提供するかもしれない・。現在の仕様諸元、充電されたりチウムバッテリー搭載、駆動は後輪のインホイールモーターですが、将来は燃料電池を組込むことにより、そして構成部品類も地球に還元される素材やリサイクル可能な素材の採用により、もっと環境保全型の夢の乗物が必ず実現すると思います。もし可能なら、弊社グループ館にぜひお越し戴き、口説ト演奏とPMのシヨウをご覧戴ければ幸いです。」講師は、自信に満ちた口調で、講演を締めくくった。深く一礼すると、間髪を入れず聴衆から拍手が起こった。その拍手は、講師の熱い口調に共感した聴衆の心であった。

翌日、マンモス館をそこにして、何としてもトヨタ館に入りたかった。三時間並んでシヨウを観たのは大収穫であった。家内他三名の同伴者と一緒に場内を行動したが、前日行動の家内の助言が大いに役立ったのは言うまでもない。家内はトヨタ館を二度観たことになるが、最終列車で帰宅したにも拘らず終始ご機嫌であった。了